

「藤樹紙芝居」の紹介 ⑬

『毎朝、かゆを炊くおばあさん』

(解説)

『鑑草』は、藤樹先生の著書では、晩年に出版されたものです。身近な家庭経営の在り方、しつけ等が描かれています。この話は、主人公のらしさんの家の仕事場を中心に描かれています。工員を雇用して、経営していることを考えますと、藤樹先生が活躍された時代に近い話ではないかと、思われる内容です。東山さんは、らしさんの息子で、父の跡を継いで工場を経営しています。

らしさんは、工員たちの健康を気づかいながら、自らも紡績の仕事に打ち込んでいます。厳しい寒さの季節を迎え、暗い雪道を歩いてくる工員を気づかう「らしさん」。心身を温めていたわりたいという、愛情深く接するらしさんの姿を知った東山さん。母の温かな優しさや人間性を学びます。

現代の暮らしの中にも生かしたい、温かい心の交流が随所に感じられるお話です。

▼出典 『鑑草』（関西大学 著・発行）

▼参考文献 『中国服装史』（華 梅 著）

(紙芝居)

① 今から、何百年も前から伝わる中国のお話です。中国のある所に、『らしさん』という仕事熱心なおば



あさんがいました。らしさんは働き者で、息子の「東山さん」が経営する紡績工場の仕事をしています。織物の糸を作る仕事です。毎朝、だれよりも早く起きて工場へ行きました。外は真つ暗です。震え上がりそうな寒い朝です。前の晩から冷たい雪が降り続けています。らしさんは、大きな鍋をかかえて、家から出てきました。

らしさん「まあ、寒いこと。たくさん雪が積もったわね。早く釜戸に火を起こして、おかゆを炊きましよう。いつもよりたつぷり炊きましよう。雪の中を歩くと、よいにお腹がすくからね。」
お米が入った重い鍋を、工場の方に運び込みました。凍るような寒さです。

② 冬になると、夜明けが遅い中国のこの地方は、朝が特別に寒い所です。らしさんは、工場に入ってきたま。大急ぎで、釜戸に火を起こしました。おかゆの鍋を釜戸に乗せ、枯れ草や小枝を入れて、火を付けました。良く燃え始めたので、今度は

まきをくべました。
らしさん「けさは特別に寒いね。震え上がるよ。早く起きて良かったわ。うまく燃え始めたね。今ごろ若い子達は、みんな震えながら、冷たい雪を踏みしめて、歩いていくことだろうね。」
しばらくすると、火加減が強くなり、鍋の中のお米はぷくぷくと、音を立て始めました。



らしさん「ああ、よかった。火の調子がいいようだね。もうすぐ熱々のおかゆが炊きあがるよ。良い匂いがしてきたこと。けさは、特別寒いから、みんなのおわんに、おかゆをたつぷりと入れてあげましよう。もう、いつ入って来ても食べられるよ。みんなの嬉しそうな顔を思い浮かべると、私も嬉しくなるね。」

③ らしさんの息子の東山さんは、お父さんの仕事を受け継いで、紡績工場（糸を作って、糸巻きに巻いて製品にする工場）を経営しています。東山さんが、震えながら工場に入ってきました。

東山さん「あれ、お母さん。こんな

に寒い日なのに朝早くから、おかゆ炊きですか。体が冷えてしまいますよ。明日からは、やめてくださいいね。」

らしさん「工場は、家の隣に建っているのだから、ここまで来るのに、三分ばかりだよ。何の苦勞もないですよ。東山、うちの工場に来る若者達は、真つ暗な道を歩いて、雪にまみれてここにたどり着くのです。冷えた体、かじかんだ手足で仕事するのはつらいものですよ。私は、温かいおかゆで、おなかと手足を温めてやりたいのです。」

東山さん「しかし、お母さん。うちの工場はきちんと給料を払って、仕事に來てもらっているのです。毎日、毎日、こんなことはしなくてもいいですよ。」

らしさん「東山、お前は私の大切な息子ですよ。働いている若者達も同じですよ。暗くて寒い雪道を、冷たい雪や風に吹き飛ばされそうになりながら、ようやくここへたどり着くのです。冷え切った体、かじかんだ手足のまま仕事をするのは、本



本